

會



報

1954年3月

172

日本山岳會

偉大なる経験の蓄積

— マナスルへの出発に当り —

堀田 彌 一

今回はからずもマナスルへ赴くことになりました。かえりみれば一九五二年四月、日本山岳會がマナスル遠征を決定した時、未だヒマラヤに経験を有する者も少く、私としても何等かの役に立ちたい念願でありました。にも拘らず何等お手傳もしない中に、一昨年度から昨年度へ續いて偵察隊及び第一回登攀隊を送り出してしまいました。他にも科学班や京大のパーテイもあり、わが登山界のヒマラヤに對する経験は飛躍的な向上を見たので、私なりに氣持が軽くなつた様な氣がしております。

一方ナンダ・コート登頂の結果の長い反省もようやく現實を抜けて、一つの映像として安定よくなりつゝあつたので再びヒマラヤへ行こうとは思わなかつたのであります。従つて昨年十二月二十九日突然ヒマラヤ委員會より推薦を受けた時、暫くの間仲々その氣持にもなれなかつたし、又何等の自信も湧いて來なかつたのでありま

は十八年前から次のヒマラヤ迄には何をし、どうあるべきかと云う様な事をよく考えました。然しその殆ど凡てのものが實行出來ませんでした。頭の中でヒマラヤ。私やの映像が美しい調和をなして來るに反して、現實のヒマラヤは遠のいて行くばかりでした。そして何時とはなしに新しい時代の層が出て來るのを待つ様になつていたのであります。

ヒマラヤでは何といつても八〇〇米級の登攀と、必ずしも登頂を目的としないう自由な旅の兩方に魅力を感じます。然し前者には自から制限があり、その望みを充たすことも亦最も困難なことであるが、後者は或いはチャンスもあるうかと思ふこともありました。今回のマナスルは私の最も弱點をつかれた様な氣持さえしました。

併し乍ら過去二年間における日本山岳會の経験の蓄積は偉大なものであり、私の様なものでも何等不安なく出掛けられる様な基礎が出来上つております。今やネパールへの道は開け、若い優秀なクライマーが育ち、凡ゆる裝備が最高の水準に近づいております。そしてその背景をなすものも亦強力に

動いております。私にとつてはこの一つの黄金時代に再會した事は終世の出來事となるでしょう。私は今新しい希望と勇氣に満ちております。成否は天候や氷雪の状態等自然の条件如何によることでしょう。結果を豫言することは誰にも出來ないことと思ひます。併し我々はこの次の遠征の爲に、又次の時代の爲に、どうあるべきかに思いを致す時自らなす可き答も出ることかと思ひます。立派な行動と良い経験を殘すことこそ最も大切なことだと信じています。

西堀氏が最初にカトマンズに入られて以來、今西隊と三田隊により年々幾多の成果と多くの貴重

ロングスタフ氏より
本会への嘉信

「去る八月發行の貴會『山岳』を御惠送にあずかり、貴會役員の方々並びに會員御一同に對し茲に厚く御禮申上げます。

私は特に一九四九頁の英文——秩父宮殿下の御言葉（筆者註）——と、今西氏の筆になる「ア

な経験を殘されました。その上に一體我々は何をなすことが出来るか、又更に殘すべき良い成果が得られるだろうかと思ひます。その責務の大きな重壓を感じない譯にはゆかないのであります。幸に昨年度の優秀な隊員が八名もあり、更に若い元氣な新人を加えて強力なパーテイを編成出來たことは眞に力強く思つております。裝備その他凡ゆる準備も萬端に亘り滞りなく運びました。この上は現地に參り、たゞ最善を盡そうと思ふばかりであります。そして會の皆様強力な御支援に對し恥しくないだけの成果を掲げたいものだと思ひております。

シナプルナとマナスル一九五二年」を特に興味深く讀みました。

悪天候のため登頂出來なかつたという事は非常に残念なことでした」

本會はこの禮狀とカードを額にして圖書室に掲げる事にしましたから會員各位も御鑑賞下さるようお知らせします。



一九五四年 マナスル登山 隊編成事情

榎 有恒

本年度マナスル登山隊を編成するに際して重点を置いたのは登頂隊に強力なものを得たいということである。カルカッタの通關、カトマンズに於ける準備と社交、多人数のポーターを使用するキャバン等々多方面の仕事の何一つとして重要ならざるはないのであるが、限られた人員と費用との割振りを考えたとき今年には登頂隊に主眼を置くことになったのである。

即ち七〇〇米以上の、まだ未知のまゝに残っている高所を如何にして登り切るかということである。昨年の経験では七〇〇米以上が餘程異つた條件となることを知つた。地形上の困難は未知と申すより他なく、たゞ知り得た範囲でもプラトンを蔽う氷原の状態とか、吹き荒ぶ烈風と寒氣とか、または個人差はあるといつても一様に受ける高山病の苦痛とか、そしてひいては體力や意力にまでも影響を及ぼすといった数々の重荷を如何に克服するか、アクリマタイゼーションが大切であるのは申すまでもないが、この個々の力量を一つに纏め上げるチームとしての

強弱が重視されたのであつた。昨年と同様に今年は他の分野の科學班を加えたいとの要望も採り

入れて案を練つたのであつた。また全國的な基盤に立つての隊員も考慮された。隊員證衝をその職務の一つとする登山實行委員會—三田委員長、村山、加藤、村木、山田四委員—はこの點について左の如き方針の下に運んだ。

一、一九五三年度隊の経験に鑑み一九五四年度隊は個々の技術の優秀性よりもチームとして發揮する力量に重点を置くこと。
二、一九五三年度隊に於て最高點到達者にして且つ全隊員の信頼を克ち得た加藤、山田兩隊員とこれを補佐する村山、村木兩隊員とを基幹として、前項の條件を具える隊を構成すること。
三、上記の二條件を満足し得る範圍に於て

イ、從來日本山岳會に貢獻し、また將來貢獻することを豫想される會員、又は國體山岳部門參加者の中より
ロ、出来る限り廣範な基盤より選ぶこと
と以上のようなものであつた。

昨年八月下旬に一九五四年度マナスル登山準備委員會を組織し、この委員會によつて、九月末日ヒマラヤ委員會及び登山實行委員會が設置された。而して右實行委員會委員の委嘱は十月一日になされたのである。昨年の経験より、今年度隊の出発は遅くとも二月下旬には爲さるべきであるとの考えからこの實行委員會に課せられた仕事はその分量はともかくとして時間的に大きな制約を受けざるを得なかつた譯である。

昨年の登山隊派遣に際してはヒマラヤ委員會を組織し、この下部

組織として事務局を設け總務、裝備、食料、研究、渉外等の事務を取扱つたのであつた。今回は昨年の経験の上に更に構想を加へ、登山實行委員會が立案、銓衡、準備等萬端の事務を擔任することにより責任の所在と能率化とを圖つたのであつた。もとより實行委員會五名の下に多數會員各位が助力を惜しまれなかつたからこそ、この短時日の間に十分の用意を整えることが出来たのはいうまでもないことである。

登山實行委員會は就任と同時に隊員の銓衡に當つて、前述の方針の下に十名餘りの候補者を得たのであつた。右委員の説明によれば、若し半力年乃至一力年の餘裕があれば隊員銓衡と訓練とに十分の期待を得んも、裝備、食料等の準備に關與させ乍ら且つ隊員の境遇の適否を求めんには、候補者の境遇並びに住居の關係上、東京在住者に結果として片寄つたる如きものとなつたことである。一昨

年及昨年の兩隊參加者を第一に、次ぎに経験、年齢等を考慮したのであつたが、選ばれた十餘名は約二ヶ月に亘つて仕事を共にして最後に八名を選んだのである。即ち登攀隊員として加藤、村木、山崎、山田、大塚、松田、日下田、松澤の八名を決定し、これ等隊員の推舉によつて谷口君が登攀隊長に選ばれたのであつた。想うにこの登攀隊は加藤、村木、山崎、山田の経験者を中核とするものであつて、殊に特色とするところは、戦前より戦後に至るわが國登山の第一線に活躍した少壯の現役を參加させたことである。

昨年田口、高木兩君によつて雪線上の技術の訓練を體得した隊員が現役を率いての隊であるので、七〇〇米以上の登攀に如何ような効果を齎らすであらうか。少くとも中心をなす隊員の希求するような隊であることは間違いないのである。八〇〇米級の山岳に對して、どのような隊の編成を最適とするか。またそのためには將來に向つてどのような基盤を作らなければならぬか。このような事でもさへわれわれの持つ経験はまだ浅く、またそれだけに回を重ねるに従つて成長することも速いように思われる。

登攀隊の八名の他に醫務、衛生保健擔當として辰沼博士を煩わした。幸いなことには山崎君が專攻の動物學方面の研究を今年も續けると共に、醫者として助手を勤めることである。われわれの隊が沿道至るところの村落で行つた施療は調査隊の林君以來の功績であつて、地方人の好感を克ち得ていることは何も兩國親善上といつた大きな立場からでなくとも、登山隊の行動を多分に容易ならしめていると思う。昨年辰沼、山崎兩君によつて收められた高度の血液に及ぼす影響などもその内に貴重な資料を提供するであらうし本年も亦醫學的資料を蒐める豫定である。

また村山君は昨年は田口、加藤、安兩君の下に渉外及びキャバン運営等に關與したのであつたが、今回は一手に引受けることになつた。勝手知つた道とはいへ、昨年の三田、田口、高木君の如き世界を渡り歩いた達者な人々やキャバン旅行の経験に豊富な加藤、泰安

君を缺く同君の仕事は一通りであるまいと思われる。毎日新聞社からは竹節、依田の兩君が昨年引續き參加した。昨年の竹節君の紀行は「毎日」紙上に登山の實態を詳細に逐次報道したところであつて、登山に當つて斯るアルバイトの如何に勞多きことであるか。今年もまた竹節君の興味深き通信を期待すると同時に隊中最年長者であり、且つヒマラヤに最も明るい同君に隊の負うところは大きいと思う。依田君は昨年の優秀な寫眞と映畫の擔任者としての経験に更に研究を加へ今回は天然色映畫に重點を置いて十分のフィルムや器械を用意しているのに更に優れたものを將來されることである。

☆

楨會長の名を冠した

ヒマラヤのエーデルワイス



この程京大から日本山岳會のルームへ、マキウスユキソウとも云う可き、エーデルワイスの一種が腊葉の型で送られて来た。これは昨夏マナスル登攀隊員の一人として、植物の調査を擔當した中尾佐助氏の採集品の中から、京大の北村四郎博士が、特に楨會長の名を冠して *Leontopodium Makianum Kitamura* と命名したものである。

この植物がエーデルワイスの他の種類と特に著しく異なる處は、花莖が根元から出ないで、前年度の莖の先に出ることである。つまり一本の莖の真中から下半分は前年度の莖、上半分は今年度の莖と云う譯である。前年度の莖は亞灌木状で、長さは10~14cm。前年度の宿存した枯葉をつける。今年度の莖は長さ8~12cmで、両面に綿毛のある多數の葉をつけ、花の周囲にはエーデルワイスの仲間の

特徴である葉状の苞が、十七、八枚星形に横がつている。

この苞の上面は特に白色の綿毛が濃く、裏面には、莖葉と同様に蜘蛛毛を布く。北村博士の記載によると、球状の頭花(花の集り)は八乃至九個で、異性の花から成り、周邊は雌性花、中心は兩性花で雌性花のみが實を結ぶ。總苞、花冠、瘦果などに關する詳細な記載もあるが、こゝには省略しておく。採集地の高度は大體四〇〇〇米前後だと云うことである。(挿畫は北村博士から送られた標本を模寫した)

尚楨會長の名を冠したエーデルワイスのほか、もう一つヤマハハコ屬の新種に、毎日新聞社長本田親男氏を記念して *Anaphalis Hondae Kitamura* の名が命名されていることを附け加えて置く。

山下一夫

マナスル先發隊より

松田雄一

私達先發隊の一行は昨日シンガポールの港に投錨しました。カルカタまでの航海のちようど半分を終つたところです。この附近赤道とはいえ洋上であり冬のこともあるので、そよ風が吹き気分は爽快で、熱帯樹の緑に眼をみはつています。

香港までの時化と異り、南支那海の航海は平穩そのものでした。早朝トレーニング、午前は會話練習、行動計畫の検討、午後のフリータイムと毎日の日課は規則正しく行われていきます。コンディションは上々です。

昨日本船を港へ誘導してくれたパイロット(英國人)は大の山好きで、休暇には必ずダージリンへ行くそうです。昨年はわがマナスル隊の隊員にダージリンで遇つたとかいつていました、アン・タルキとは大の親友で、かつて一緒にシエルパを掴むことが成功への第一條件だなどと親切なアドヴァイスをしてくれ、ヒラリーのサインのある名刺を大事そうに見せてくれたりしました。

私達が出發の時松方さんから頂いた *The Ascent of Everest* を見せた Oh! Very good book だ。この本をよく讀んでいれば間違いないと大悦びでした。趣味を同じうする人間、中でも山を通してなら國境も何もありません。板

倉さんの「山と雪の日記」の一節を思い出して見たりしました。もう間もなく出港です。次の寄港地はペナンです。豫定より一日短縮しこゝで私達の荷物を積んでいる三井ラインの協立丸より先行することになります。

二月十六日朝
シンガポールにて

オーストリア 山岳會から

奥國山岳會々長ブルージック氏より二月末次の如き親愛の情をこめた鄭重な書面が本會長に届いた。

尊敬措く能わざる會長殿
我々のクラブに對する貴下の好意溢れる言葉並びにわがクラブの

創立七十五周年に寄せられた祝辭に對し衷心よりお禮申し上げます。貴下がウインにおけるわが記念祝典に御出席頂けなかつたことを大變残念に思っています。祝典は思いの外輝やかしく行われ、アルピニズムの最も古いパイオニヤーを含めた全歐洲の優れた登山家諸氏のご列席を得て實に立派なものとなりました。

悪天候に悩まれたマナスルへの挑戦を我々は大きな關心と同感情とを以て見守つていました。誠に残念なことだと存じます。今年こそはその御成功を心から切望し、堅く「親指」を握りましょう。

登山家の挨拶を以て
二月四日
奥國山岳會々長
ブルージック

〔註〕ブルージック結びで有名

山	山	山
秀	山	山
山	Ski	山
	と山の用具	
山	山	山

プライス・リスト進呈
電話東京(28)8456・7414 (事務所用)
中央区横町1の1
東京駅・八重洲口ヤンマービル横丁



老友・岡野さんのこと

高野 鷹 蔵

去年の十一月末に吾々老人組が會の図書室に招かれて、マナスルのスライドを映寫し三田さんの説明で久しぶりに皆さんと會え、愉快な嬉しい半日を送った。(會報一七一號参照)

所が思わざる珍客が見え、なお更に驚きと喜びとを重ねた。岡野金次郎さんその人である。御目にかゝるや否や、久瀧を叙すと「君はいくつになった?」と云うので漸く七十になったと答えたなら、「未だ若いなア」と云う御挨拶である。實は岡野君と云う人は吾々に一寸多い位の年齢と思ひ込んでおり、又恐らく三十年振りで御目にいかゞつても、そうとしか思えない程、變遷たる風貌である。五十年も前に見かけた如くガッチリした短軀は若い頃そのまゝである。頗る無造作な身装に下駄履きと云う山の中から出て来た様な恰好も、昔の山岳人を偲ぶに足りるのである。

茲でまた更に思いがけぬ事は、岡野さんは會の理事の望月君の叔父さんだと云うのである。此日の前日に鐵道博物館で、マナスルのスライド映寫會があると、ラジオ

が放送したのを聞いて、岡野さんは矢も盾もたまず、着のみ着のまゝで平塚から鐵道博物館に駆け込んだ所を望月君が見つけて、あした山岳會のルームに名譽會員が集るからと無理に一泊させて今日つれて来たと言ふわけ、だから着のみ着のまゝの姿も往年の山岳人の情熱を思わせるもので、むしろ昔の岡野君の姿を再びするの思いが深かつた。

日本山岳會創立の頃の事實は、以前小島さんや武田君や筆者が書いた事もあり、又幾度か語りつくしているが、岡野さんの事は實は直接會の創立にはタッチされてないので、誰れもが殆んど述べていない。然し事實から云うと、吾々山岳會の發起人は會そのものの創立に觸れたが、小島君とウエストン師の連絡、それによるアルパイン・クラブと山岳會の接觸等々の今日の日本の山岳界のほんとうの起動點をなしたのは此岡野老と云つてよいのである。小島さんも書いた事があるが、筆者が覚えてるまゝその片鱗を書いた見た。

岡野さんと小島さんと知合つた動機は徴兵検査の際と聞いている。初對面が素ハダカと云うのも面白い。斯くて兩君が山に入つた事は度々である。その頃筆者は横濱にいた。自分の家は小島君の勤めていた正金銀行のすぐそばで、當時の居留地や縣廳への往還に當つていた。岡野さんはその頃どこに住つていたのか知らないが、毎朝通勤の定刻になると岡野君が短軀に胸をそらして颯々と、私の家の前を通るのが、未だつい近年の

岡野翁の想い出

★伊藤秀五郎★

想出といつても山の上の語ではない。街のまん中の出来事である。三十五年ほど前の中學二、三年頃のこゝだが、放課後野球などして遊んでいて、夕暮近く校庭附近にしばしば現われる、異様な出立の中年の一人物があつた。

古洋服に草鞋脚絆、筒に巻いた糸立の着ゴザを背中にしよつてゐる。それに年中カンカン帽子といふのが振つてゐた。人品は卑しうなげだが、街の中では身ごしらえがどうにもおかしいのである。當時横濱一中は郊外に近い西戸部の丘の上にあつて、校庭の近くにもまだ畑や廣い笹原が残つていたから、散策には向いてゐたが、草鞋脚絆に着ゴザは少し大げさなようだし、それも毎度のことなので重いとも軽いともかぬ足取のあのどことなく風格のある變つた人物は、頭が少しどうかしてゐるのではないかと、心中ひそかに氣になつてゐた。時にグラウンドを横切ることもあつたが、たいていは校庭に沿つた裏路の一隅から、遊技に夢中になつてゐる私たち少年の群をしばらく眺めてから、どこにもなく立去つていく。格別舉動に不審もないので、誰も口には出さなかつたが、私たちの仲間には皆同じようなことを考えていたに

違ひない。夕暮近かつたが、ある日學校の歸りがけに、私たちがデカン高原と呼んでいた學校からあまり遠くない草原の丘陵に行つてみると、例のゴザの上に仰向けに寝ころんで、大空を見上げてゐる彼を見かけた。私はそのとき、ゴザがたいへん重寶なものであることを知つて、幼年の頃の飯事遊び以来忘れていたゴザの魅力をまた新しく感じたのであつた。

春だつた。ある土曜日の午後、學校の歸りしな、年上の從兄弟のOを本町の勤先に訪ね、二人で櫻木町の方へ歩いてくると、例の人物がいつもの服装で横通りから出てくるのにばつたり會つた。私がOにこの人物に關する知識を披露する前に、從兄弟とは舊知の間柄とみて親しげな挨拶を交し、箱根へ泊旅行に行くところで、話の様子では、甲斐絹商人が暇をみて馬で峠を越して湯治に来る底倉がいつも行きつけの根城で、そこから「天下の嶮」を歩き廻る寸法らしい。乙女峠の新緑が楽しみだというような話である。これが誰である、若き日の岡野金次郎翁その人であつた。若いといつても大正の中頃のことであるから、もう四十は越しておられたはずである。三田幸夫君が慶應の豫科の頃で、横濱から通學していたが、時々朝市電の中で、體ほど大きいルックサックをもつてゐるのを見かけた當時のことである。

水さんや木暮さんの名を知つたのもその從兄弟からである。山好きといつても日本アルプスなどに出かけるのではなく、當時横濱に出来て間もなかつたアルコウ會というハイキングの團體の世話役だつた。アルコウ會はたいへい日歸りの旅だつたから、せいぜい奥多摩とか大山とか房州の鋸山程度であつたが、私も時々從兄弟に誘われて同行した。市の公會堂の山の講演會で、はじめ木暮さんの秩父の話をきいたのもアルコウ會の主催であつたように思う。岡野さんが、ウエストンの日本アルプスの本を最初に發見した日本人だつたことも、その時Oから聞かされて長らく疑問符だつた人物の正體がわかつたのである。

如き思いがする。最も忘れられない事は、岡野さんは必ず英字の本を片手で持つて、それを讀みながら歩いている。今だつたら自動車にブツつけられるのだが、五十年も前で横濱でも馬車と人力車の時代であつたからであらうか。兎に角私の家の前は縣廳通いの役人や商館通いの人達が水の流れる如くに一定時刻に通う中に忘れられない印象である。

當時岡野さんは米國のスタンダード石油會社に勤めていて、爾來何十年とか勤續して隠退後もその功により、會社から年金（というか）を贈られており、戦争中は中絶したが終戦後は再び復活したと云う話は小島さんから聞いた話である。兎に角ひとさまの話でも嬉しい次第である。

この岡野さんがスタンダード石油會社に勤務していたので、その仕事の事からウェストン師の「The Japanese Alps」と云う日本の山の本のある事を小島さんが知り、それから問もなく當のウェストン師が目と鼻の先の山手にいらるゝ事がわかり、引きつゞいて横濱の外字新聞はそのウェストン師が日本アルプスのスライド映寫の講演會があると傳へ、そこに岡野さんと小島さんが訪ねて初めてウェストン師と結ばれやがて武田君や吾々がウェストン師と會ひ、問もなく山岳會創立の機運に際してウ師の推奨によりアルパイン・クラブからの激励となり、茲に今日の「日本山岳會」の起動力を得、吾邦の山岳界のスタートが出来たと云う次第は、岡野さんが吾が會の創立者ではないが起動力者（變な字句だ

が）の一人と云うてもよいであらう。今一人は勿論ウェストン師である。（因に岡野さんの生い立ちや御仕事などは、日本山岳界史のため御親族の望月理事に此一文に追記して置いて頂きたいものと御希いします）

編者より——望月理事に追記を御願ひする餘裕は時間的に北かつたが、幸にもこれより先に北海道の伊藤秀五郎氏から下段の如き一文を寄せられたから併せて讀まれば興味深いものがあると思う。なお望月氏にも機會あらば高野翁の御希望に應える一文を會報に寄せられんことを願ひします。

八十の大先輩と七十の大先輩の邂逅の當日の歡喜の様は、當日の出席者の一人として未だ判然、眼に映じて止まない。事實我々若輩はこれ等大先輩の前にあつて唯茫然たる事暫し、暫らくにして漸くこれ等大先輩をいたゞく光榮に氣がついた様な次第である。

名譽會員の大先輩を中心に集る會はその御老體に御迷惑無き限り度々我々若輩會員の望む所であるが、當日の如き豪華版はチョット近來無いようである。

× × ×

場にも驚かなかつた青年の客氣の荒武者も、度膽を抜かれたという内容である。一通り頁を繰つて内容を確かめると、取るものもとあえず正金の小島さんに電話をかけた。この邊の事情は小島さんも書いていたように思う。この話をきいてからだいぶ時間がたつたので私の記憶は少し疑わしいが、驚いた小島さんがたしから早速岡野さんのオフィスへ駆けつけ、二人で改めてこの本について話し合つた。さて、ウェストンとは何者か、ということになつて、出版元に問合せるか何かして調べてみると、これはまた意外にも、著者ウェストンはつい目と鼻の横濱の山手に住む宣教師ということ判つた。早速ウェストンに手紙を書き、それから二人のウェストン訪問という下りとなる。始めて會つたウェストンから、山のとりこになつていたこの日本の二人の青年は、スイスのアルプスのことやイギリスの登山家の話などをきいた。アルパインクラブなるものの存在をはじめて知つたのである。これが「日本山岳會」誕生のそもそもの發端になつたのだつた。飾り氣の少いウェストンの書齋には、一本のピッケルと北齋の富士の版畫が一枚かかつていた。その雰圍氣から二人の日本の青年登山家は何を感じたかとは想像に難くない。

私たちが、神中の近くで岡野さんを見かけたのは、そういうことがあつてから十年以上も経つていたろう。當時小島さんはアメリカに赴任中で、岡野さんもすでに日本アルプスのような高山の登山はあまりされなかつたようである。いつの頃からの習わしか聞き洩したが、土曜日の午後、時に週日の夕暮近く、郊外を歩き廻ることが道樂であつたらしい。オフィスに散歩用の装束一揃を具えておいて、仕事が終わるとそれに着換えて出かけたということだ。オフィスは山下町にあつたから、本牧や根岸、磯子の方へ行くにも、弘明寺や神奈川あたりへ出るにも、野毛から西戸部へ抜けるにも、何れにしても盛り場を通ることになるのだが、岡野さんは氣にかけなかつたらしい。いつも神中の近くを通つたのは、岡野さんの家がその近くにあつたからである。

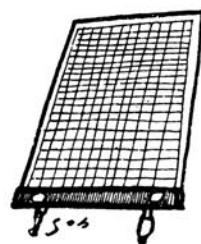
私と中學同級で、しかも野球仲間、岡野昇君が、岡野さんの長男であることを知つたのはずつと後のことだつた。岡野さんが、中學の傍を通るたびに、校庭の一角にたたずんで、元氣に跳ね廻る私たち少年群を暫く眺めていたのは、そのためだつたかもしれない。そういうえば、その時の岡野さんのまなざしには、遠くから靜かに子供の成長を見守る父親のやさしい心の輝きがあつたような氣もするものである。しかし私たちは、笑ひながらあれは俺のおやじだよ、ああそうか變つてゐるなといった工合に話し合うほど、物にこだわらない年頃にはまだなつていなかった。少年昇君が、父親の散歩姿に何か氣恥しさを感じたとしても無理もなかつた。昇君は、自分の父親が、山登りの世界では、知名であるかどうかにはかわりなく、實際には偉い人であつたこと、もし岡野さんが山登りをしなかつたら、小島さんの「日本アルプス」

Château Brillant

山頂で 山小舎で
アルペンの氣分が満喫出来る
純フランス式高級ブドー酒

サドヤ醸造場 甲府市御膳町
(現品は山岳會ルームにあります)

(一九五三・二・八)



第九回國體登

山の實施要綱

第九回國民體育大會登山部門の實施要綱は次の如く體協國體委員會で決定したからお知らせします。

1 期日 昭和二十九年七月二十四日から二十八日まで

2 開催地 北海道中央高地(大雪山)

3 集合地 旭川市

4 運営要綱
一、開會式 七月二十四日 旭川市常磐公園

二、行程

七月二十四日 開會式後バスにてABCの三班は層雲峽に集結、一泊。D班のみバスにてパイパンに集結、一泊する。

二十五日

A班 層雲峽—スタブヤンベツ泊(テント)

B班 層雲峽—石狩川・シビナイ川合流點泊(小屋)

C班 層雲峽—高根ヶ原泊(テント)

D班 パイパン—沼ノ平泊(テント)

二十六日

A班 野營地—沼ノ平泊(テント)

B班 野營地—高根ヶ原泊(テント)

C班 野營地—化雲岩泊(テント)

D班 野營地—黒岳(テント)

二十七日

A班 野營地—天人峽温泉泊

B班 野營地—ユコマンベツ温泉泊

C班 野營地—天人峽温泉泊

D班 野營地—ユコマンベツ温泉泊

二十八日

A・C班 天人峽—バス—旭川市

B・D班 ユコマンベツ—バス—旭川市

三、閉會式 二十八日午後五時より、於旭川市

5 参加人員及び別

各都道府縣選手四名 監督(兼リダー)一名 計五名

A班 六〇名

B班 六〇名

C班 六〇名

D班 五〇名

備考

1 山中泊はテント露營を原則とし山小屋を併用する

2 山小屋は既設及び新設二ヶ所を豫定する

3 各班の編成、コースは今後も若干の變更あるものとする。

6 申込方法

申込書に所定事項記入の上六月二十日までに所屬都道府縣體協經由の上左記三ヶ所へ一通宛送

付すること(申込期日を厳守されたい)

▼東京都千代田區神田駿河臺四ノ六岸體育記念館構内日本山岳會

▼北海道札幌市北三條北海道廳内 第九回國民體育大會組織委員會事務局演技部

▼北海道旭川市役所 第九回國民體育大會旭川市協力委員會事務局

尚詳細は會報次號にてお知らせすることが出来ると思います。

二十八年度の會費についてお願い

本年度の會費を未だ納入されていない方は至急お納め下さるようお願いいたします。

★基本會費 年額六〇〇円

★ルーム維持費 年額一五〇円

(地方會費は六百圓を、東京都、千葉、埼玉、神奈川居住會費は七五〇圓を御納め下さい。なお東京在住會費は支部費五〇圓を加え八〇〇円となります。)

新・隊・員・の・横・顔

大塚博美(29歳) 細野テント店勤務、現明大山岳部監督。現在現役陣に最も身近にある人。高校山岳連盟理事として若いこの層の開拓に努力している。新メンバー中のホープ、明大出。昭和24年入會。

松田雄一(23歳) 日本水産勤務船乗りとして南氷洋にも活躍。昨年國體技術役員。日大出。昭和28年入會。

山下田實(23歳) 昨年一月早大山岳部の南米アンドン系アコンカグア登頂隊員。最高所の食糧係を担当、早大政経學部四年。昭和29年入會。

松沢幸雄(23歳) 古河電工勤務戦後同山岳部再建に努力、初参加であるが高所用食糧係を担当し活躍を期待される。慶大出。昭和26年入會。

北村嘉助君逝く

藤島 玄

不幸な報告を越後支部としてしなければならぬのは誠に遺憾であります。

二二六番北村嘉助君は昭和廿九年二月廿一日、新潟縣北蒲原郡笹岡村、菱ガ岳(九七四米二)でスキー登山の歸途、吹雪で遭難死しました。一行は北村君がリダーで、會員赤澤清明、平田静一郎、會員大崎一雄外三名計七名で、昭和十七年二月十一日、同僚三名が菱ガ岳より五頭山に向つて遭難死したその十三回忌の慰靈登山であり、又記念碑建立地の視察行であつたのが、不幸にして又遭難者を二名出してつたのである。

リダーは年配であるが故の家庭人として複雑な悩みもあつたが、常に慎重を欠き、適切な判断を誤つたきらいがあるが、遭難の原因としては、一行全體が雪不足などで今年は豫備練習なしにスキー登山に出た事や、自分のスキーに故障があつて、今流行の鯨面形の頭をしたゲレンデ用の新スキー

にカンダハハ絨具であつたり、山が雪不足で藪がひどいのに天候急變して猛吹雪となり、下山する頃には新雪が二尺餘も降つたり、他動的には思わざる他のパーティーが後から登つて途中でコースを誤り半死半生で下山したシェブールに夜になってから迷込んだり、その他数々の悪條件が重つて、遂に同行者の山口君と前後して倒れたのであつた。

然し赤澤、大崎、平田の三君は菱ガ岳の下山から北村君の悪化に氣付いて命懸けの奮闘をしてくれた。スキーを取替へ遂にはスキーを脱ぎ胸までのラッセルまでして抱き降してきたが、北山(六三二米三)の北尾根一五〇米降つた稜頂の簡単な雪穴で午後十時頃に永眠したのである。

村杉温泉からの救援隊(自發的出動)と早く連絡がつけられて、ひどい凍傷の一名を加えた五名は翌廿二日午前二時頃温泉に收容され、一方直ちに遺體引取り作業にかり、同日午後三時二つの遺體は温泉着、檢視後新潟市に向い、廿四日葬式を済ませたのである。

北村君とは同じ職場の三十年の山友達で、片腕とも頼む間柄、飯豊連峰の相棒として数々の新ルート登攀に苦樂を共にしてきたのであつた。電話と共に用意して駆付けたが、村杉温泉荒滑旅館はじめ地元各位の熱心な援助協力、勤務先の新潟鐵工所内燃機工場の物資・人員の惜みなき救援と、幸い恢復してまた天候にも恵まれ、以後の事は順調に進んだ事と、縣下岳界各位の熱烈なる激勵を、ここに厚く感謝する。

図書紹介

マナスル 一九五二年
—三年

を讀んで

横 有 恒

本會編、毎日新聞社刊の「マナスル」がいよいよ発行されることになった。これは昨年登山隊の歸着と同時に取り掛つた事後の仕事の一つであつて、一九五二年の調査隊及び同三年の登山隊の記録を一書に纏め上げることであつた。

この兩度のエクスペディションの豊富なそして多岐に亘る收穫を纏め上げることは、われわれの義務でもありまたこの計畫が如何に行われたかとの點をも明らかにすることによつて、一面世の理解を深めることも出来、また裨益することもあると考へたのであつた。

出版に當つてわれわれは從來諸外國の登山隊の著書に見るような隊長または一個人の記述によつて纏め上げる行き方を避け、本會の編纂によつて、擔當各隊員の執筆を煩わすことになつた。一人によつて纏め上げられたものは、調子も一貫し、殊に個性の持味を發揮することが出来るのは申すまでもないのであるが、會としては総合的な記録に重點を置いたのであつた。

このような方針の下に本書は紀行、寫眞、附表、附圖、附録を収めることになつた。紀行と附録は

調査隊と登山隊のもの二四〇頁を占めている。カルカッタ到着よりカトマンズを経てマナスルへと進展する大部隊の行動と經過する地方の景觀が如實に記録されている。殊に私の興味を覺えたことは困難多き行程にあつて、何時も隊員の間にユーモラスな氣分の漂つてゐることであつて、この平易な氣持を尊いと思つた。本文のあとを二〇頁、英文に割いて外國人への便を図つてある。紀行と對照的に本書の主要紙数を占めるのは六四頁一八〇枚の寫眞である。大戰後始めて外國人の入國を許可するようになつたネパールは、いまだ世界にとつて新しい未知の地域を多分に残してゐるのである。

マナスルという名はわれわれに今や膾炙されてはゐるが、この數多くの寫眞の示すものは、単に隊の經過を現わすのみならず、何れも珍重され得べき内容を持つものと信ずる。また附表の行動運行情報は如何にしてマナスルの登頂に向つたかを限なく知ることの出来る一覽表であつて、B・Cより日を逐うて高所へ進む隊員の休みなき努力を語つてゐる。そして忌憚なく云へば見る者にとつては隊の特色も弱點も共に卒直に露わしてゐるといふやう。またこの運行情報の他にネパール・ヒマラヤ略圖、中央ネパール・ヒマラヤ概念圖及び一九五三年登山隊登路説明圖の三葉の地圖がある。調査隊出發の際には地圖の入手にさえ苦勞したことと思へば、これ等の地圖の挿入は當を得たことである。

人文地誌、醫學的考察、寫眞の各分野に於ける記録があり、これに經費及びネパール關係文獻目錄を加へてゐる。この附録は残念乍ら紙数の都合上何れも要約したものに止つてゐるが、本計畫が如何に行われたかの規模と内容とを窺知するに足るものである。と同時に想起するのはかかる規模の登山隊の派遣を可能ならしめたわが國登山界の潜在力と世の大きな支援である。薩の力の大きさを忘れることは出来ないのである。おそらくこの附録は今後のヒマラヤへのわが國よりの登山隊にとつて一つの軌跡となるものであらう。なお全體として本書は裝訂に於ても用紙についても、また版の組み方や大きさについても十分な考慮が拂われてゐると考えられる。

終りに當つてこの仕事に關係された方々の並ならぬ御盡瘁に對して深い感謝の意を表したい。

Bergsteigen

オーストリア山岳會の七十五周年(1878~1953)の記念誌で、同會々報の1954、1-2月号の特集として同會から出版されたもの。S. Walcher-Wienの著であるが、この種のものを個人で書くのは並々でない。しかも内容はすつきりしてよくまとまつてゐる。

B5判 98頁。カットも廣告もそれに地圖も一つもないのは一寸固苦しいが、そのため寫眞六葉はかえつて映える。何れも山ばかりでアルプス四葉に次いで最後の二葉は同會の歴史を表わすナンガとカンチで素晴らしい。

内容は勿論、七十五年という長い傳統を持つ同會の歴史と業績を表わすのを主眼としてゐるが、先ず所謂序論に始まり、次いで詳論として、その題目だけを挙げると登山者同盟、OAKの歴史、それから山登りの問題とOAKと、そしてOnhe Führerから始つて冬山迄を論じてゐるのは面白い。

次がこの記念誌の主要眼目である同會の歴史的業績であるが、ヒマラヤを始め國際的に活躍した會員の大勢の同會の事なので、そのダイジェスト的に手際よくまとめられた業績は大いに参考になり、その儘世界の山岳界の動きが判る。それは単に山行のみについてでなく、會員の科學・藝術・文學上の業績、更に個人別の會報執筆目錄、日特別の會に於ける講演題目等がある。

最後にシグモンディ外四人の業績紹介と會員で戦争で死んだ人及び、未だに山に留つてゐる人、の場所と月日、その原因が擧げてあるが、特に後者については實に百十九名がこの七十四年間にその魂を山に留めて居り、その原因の判明してゐるものの内、七、八割迄が墜死であるのは、この會の山登りの性格の一端を表わしてゐる様に思われる。(戸野)

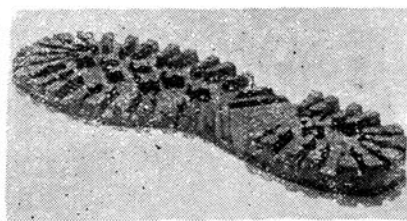
「山日記」への推せん文

「山日記」一九五四年版に對して今回文部省社會教育局長寺中氏は次の如き推せん文を寄せられました。

過日英國映畫「ヒマラヤ征服」(八頁四段目へ)

八重洲口營業所

中央区呉服橋二の五
東京駅八重洲口下車
鉄鋼ビル筋向イ角
電話(27)五六五四



山友社 高橋靴店
東京都新宿区三栄町3
電話 四谷 (35) 1929

登山用品

東京・新宿駅前

かずみ

TEL(35) 2959・2960



通信員

正月の恵那山

古沢 肇

例年の暖冬でこのところ冬がや
つて来ても雪が少ないが、おかげ
で思いもよらぬ冬の旅が楽しめる
ので、登山者には天國のようである
過る正月の休み、十日程三信
の奥を歩いたついでに伊那側から
恵那山に登った。以下その報告。

「飯田市―バス―駒場乗換―園原
―戸澤―恵那山日帰り往復」飯田
から園原までは三州街道を南に一
時間半、園原から戸澤までも一日
に二回はバスが登る。戸澤には旅
館はなく民家に泊めて貰う。一月
四日、丸一日を費して八合目まで
で雪踏みがてら試踏、途中から降
りてはじめての寒のためぐし濡れに
なつて退却。翌五日、新雪、晴曇
区々、八時頃宿を出て二時すぎ頂
上着。雪は山頂でも一米足らず、
宿の借り物の輪カンで膝くらいま
で、新しい測量やぐらが立ち、小祠
に小さなエビの尻尾はあつても氣
温は零度という暖かさであつた。
この戸澤口は中津川、落合口は

ど人に知られず、またお隣りの神
坂峠、富士見臺に人氣を奪われて
近年は夏も登る人が殆どない由で
あるが、歴史は古いらしく、日歸
りコースとして簡便なことこの上
ない。また近年、木材景氣のおか
げか、地圖にもない立派な木馬道
が發達して、麓から八合目まで
はこの伐木道を利用することがで
き（五万中津川圖幅記載の山道は
廢道）六合、八合目見當のところ
に夫々飯場の小舎があつて宿泊も
できそうであつた。

雪の美ヶ原

小田部 學

昨夏、美麻村を通つたとき後立
山連峰の大觀に接し何か新鮮しい
山を發見した様な氣がしていたと
ころ、松本の友人に美ヶ原をさそ
われたので、再び北アの銀嶺を心
ゆくまでながめたいと思つてカメ
ラも用意して出かけましたが、あ
いに北アは雲の中で残念でし
た。

けれど訪れる人もない雪の高原
は寂寥として胸をさめるものがあり
ました。五萬の地圖のルートは變
り、頂上の手が頭へは石切場から
直接登るルートがあり、鹽くれ場
と三城牧場との間は百曲のコース
で結ばれております。スキーには

頂上は一面の雪原であり、峰への
斜面は岩とブッシュが多く快適と
は云えませんが毎夜マイナスイニ
〇度に下る氣温は全くすばらしい粉
雪を味わしてくれそうです。三城牧
場は昔平に似た感じの處で初心者の
スキーにはよい處です。こゝから
茶臼山へのコースはよさそう
です。霧ヶ峰が向かなくなつたシー
ロイファにとつて愛すべき處では
ないでしょうか。機會があつたら
辻村さんの本でもかゝえて又訪れ
たいと思つております。

落葉の峠路

坂倉登喜子

十二月十三日、冬にしては暖い
陽ざしを身に一杯浴びて、落葉の
峠路を、小佛峠から美女谷嶺泉へ
婦人部の皆さんと愉しく歩いて参
りました。

雪を待つスキー前の冬の日、
去年の二色嶺泉での忘年會の思い
出をたぐつて、今年は小さな峠を
越えて、高尾山麓の美女谷嶺泉を
選びました。

八時十六分發浅川行の電車には
それでも登山者の姿が以外に多く
皆それぞれに中央線の沿線の山山
へ行くらしく見受けられ、たのも
しく感じました。

浅川から小名路の分岐を右折、
小佛開跡を過ぎて、山麓の部落を
抜け峠への登りで一汗しました。
冬でも峠の上に茶店が二軒出て
いて、温い濃茶を飲ませてくれま
した。誰もいないひつそりとした
峠で少憩後、峠から真正面に相模
湖を見下し、落葉をかきこそと踏
みながら澤に下り、トンネル入口

（七頁四段目より）
を見ましたが、その中に「なぜ危
険をおかしてまで山に登るのか」
「それは眼の前に山があるから
だ」と言うところがある。この言
葉は登山家の心理を實にうまく言
い當てたものである。山はたし
かに人をひきつける、しかし登山
と言うと過去いくつもの遭難事故
が想起される。不可抗力と言うよ
りも登山者の不注意、不用意、不
當な自負心等に基因している場合
が多いのではないだろうか。危険
防止と山をより楽しくする意味で
この「山日記」は内容がよく行き
届いたものであり、登山者の必携
品の一つとして、誠に適切なもの
と思う。

文部省社會教育局長
寺中作雄

「山日記」の訂正

六十八頁。（三三）シブトンの
「ナンダ・デヴィ」中「テイルマ
ンと共の登頂記云々」を取消しま
す。（シブトンはテイルマンと一九
三四年にリシ・ゴージをさかのぼ
っています）

登頂記は（三四）のテイルマン
の「アセント・オヴ・ナンダ・デ
ヴィ」です。（この時はオウデルと
一しよです）
右間違えまして誠に申謝ござい
ませんでした。

田邊主計

★

高所用露營天幕

登山とスキー用具

千代田區神田 須田町 2-23 細野商店 電話(25)6428

登山靴とスキー靴

日本山岳會員御愛用の店

東京 神田
専修大学前

森田靴店

TEL (33) 3716

を右へ丸木橋を渡つて、美女谷鎮泉への近道をとりました。美女谷鎮泉はバスへの便がよくないため、すっかり都會風になり山靴の女性達は入るのに少々とまどつた形でしたが、それでも豫約してあつた室に落着いて、風流な温泉に入浴後、女性向きの液體な湯まり、豪華な御持参のスキヤキ鍋をつついて、愉しい懇談を續けました。

婦人部への抱負や、行きたい山への希望、ヒマラヤの話などに花を咲かせ、神谷、渡邊、村井さん方のおいでが無いのを残念に思いながら、二十八年最後の集いを終り、五時二十五分浅川行のバスで歸途につきました。

高橋健治未亡人からの便り

(松方三郎氏宛)

拜啓 本日私は「山岳」第四十三年号を受取りました。大變有難うございました。長い間貴君に御手紙を差上げたとい私は思つておりました。私は日本の登山界にとつて興味ある詩を「山岳」に發表したく存じております。その詩は戦前のものなのですけど。

この夏私ははじめて私の娘と共に「募参り」をすることができました。高橋は決してお墓を街の中に望みませんでした。山々のあるところ、そこにのみ私はいる。彼は日本のあらゆる山々の中にあつた如くに——。

十三歳になるエリザベートと共にした十日間の山旅を「山岳」に

書きたい——英語で——という氣が致します。もし貴君がそれが發表され印刷されるとお考えになれば私はそれを間もなく完成するでしょう。日本語は貴君自身がそれにつけて下さるでしょう。

私は古い愛する絲の道を辿り同じ場所にテントを張り——それは稀にみる山旅でした。——案内人無し、台風と雨をついた——十五年後の、

ローゼ・レッセル

アメリカ空の旅

日 高 信 六 郎

一月十四日から二月末日まで四十五日の間に中南米九ヶ國を飛びまわつて來ました。羽田を深夜に立つて最初に見たのはハワイ群島カウアイ島の火山でした。

メキシコ市につくと、南東にポカテペトル(五四五二米)の円錐とイスタシウアトル(眠れる乙女)(五二八七米)の巾ひろい姿が雪をいたゞいて見えます。

こゝからポボは肩まで自動車を利用すれば強行日歸りが出来るそうです。飛行機はその東をすすめて、墨國最高のオリサバ火山(五五五〇米)との間をぬけて中米の高原を南に下ると、つぎつぎに円錐形の火山と湖とが眼をたのしませ、中には煙をはいてゐるものもあります。

ペルーに入つたのは朝でした。左手に遠くアンデスの雪峰が旭日を背にかゝやく、脚下は荒涼たる砂漠の起伏です。

チリのサンチャゴを飛び立つて

霞の上にぬけ出ると間もなくアンデスの主稜に近づく、氷雪を被る赤褐の岩山の河をこえて行くと、行く手にアコンカグア(七〇三五米)が南米の盟主らしくいかつい肩をそびやかして迫つて来る。夢中になつてカメラを構えたり關根君たちの登路を辿つたりする間に分水嶺を越えたとたん俄然機動搖がはげしくなる。メンデサの町をはるかに下に見てパンパスの草原にかゝると下界は一面の雲海におおわれてしまいました。

北米の旅のおわりに朝早くデンプターの邊でロッキを越え、ホルンにつく前にオアフ島を東南からまわつて、ダイヤモンドヘッドやパンチボールなどの名所が、ひくひく火山の火口のあとであることがよくわかりました。

房總半島の上空から嵐の後の雲の切れ目にわが富士山の端正なすがたを見付けたのはうれしい旅の巻でした。

なおサンパウロでは慶應山岳部のふるい先輩安東省史氏に、ワシントンでは會員の湯本武雄氏に會つてマナスル遠征のニュースを傳えて喜びを共にし、安東氏から愛用のダンヒルのパイプを托され、後輩の谷口氏に渡してマナスルの上で使つてもらい度いと頼まれ、今夕堀田隊長一行を見送るときに谷口さんに手渡したのでした。

(三月二日夜記)

雲 取 行

神 谷 恭

こゝ數年山で新年を迎えてゐるので、舊臘三十日夜氷川で靜岡の

牧野君とおちあい、山莊の眞鍋君と炬燵を圍み久方振りに近況を語り愉快であつた。

十二月卅一日早朝雲取山ノ家の富田君が偶然來合せ、共に食事を済ませ、重い荷は一切富田君に背負つて貰ひ八時四〇分發のバスで出發。鴨澤からの登りも、いつもアゴを出す七ツ石の急坂も汗もかかず、遊山氣分で歩いたことは有難いことであつた。

それに暖冬異變の御蔭で、例年ブナ坂邊りから相當積雪を見るのに、小雲取へ來ても皆無で漸く山ノ家附近に斑々に點在するのみで少々物足らぬ感じ。山ノ家には先着の登山者十五、六名が懐かしい大暖爐を圍んで賑やかで富田夫人は「今日邊り御見えになる様な氣がしました」とよろこんで呉れる。

夜は牧野君ご自慢の板前を見せ、例の通り灘の生一本が立てられ、すべてを忘れ楽しい年越しをした。

元旦、初日の出を迎えに暗い裡に頂上に登つたが零下十七度の寒風は仲々身に沁みる。やがて日の出と同時に耳をつんぎく銃聲三發驚いて振り返つたとたん、獵銃の主から「神谷サン御目出度う御座います」と挨拶され、それが三條ノ湯の木下昇君で互に奇遇をよるこぶ。頂上の展望は快晴に恵まれて實に素晴らしく、遙か十文字峠の上に北アの銀嶺まで觀られた。カメラに熱中してゐる牧野君を促し小屋に戻ると、富田君は「今日は元旦の祝いですから一杯やりましょう」と熊に牝鹿のスキ焼を肴に、熊狩の武勇傳を聴きながら豪華な馳走に満腹し、午後から芋木のト

ツケへ。

雪の無いのがもつての幸で、深々とした苔のカーペットを踏み黒々と密生した針葉樹林の中を登り、白岩との鞍部へ下つて小屋へ戻つたが、この邊りは自分に最も好もしい境地である黒木立のヤニの匂いを想うだけでもゾクゾクする。二日は午後三條ノ湯へ下る。富田君も年始御伴作と云われ、前日來られた會員中島博君の一行三名と共に三條ノ湯を訪ねる。鎮泉は凍つてゐる爲一丁程離れた湯元にドラム缶で沸してあるのに入つたが天字通りの露天には僻易。三日早晩富田君は雲取へ歸り、吾々一行は奥秋へ戻る昇君と共に丹波へ下山、三時五〇分のバスに間に合い歸宅の途につく。

一九五四年

會員總會

一九五四年會員總會を左の通り開催いたしますから万障おくりあわせの上、御出席下さい。

時……四月二十四日(土)

午後二時

所……東京都千代田區神田駿河臺、日本體育協會會議室

終了後次の事くスライド映写をする。

アンナブルナ

藤平正夫、舟橋明賢兩隊員



★スキー懇親會報告

學生部

かねてから望まれていたことではあるが、その場になると何やかやの理由でお流れになつていた學生部主催のスキー懇親會を思い切つて一月の二十三、二十四日の兩日、志賀高原で行つた。あいにく試験シーズンにかゝつてゐるため、相會する者現役二十一名、OB五名程度の小じんまりしたスキー行ではあつたが、楽しい又有意義な集いであつた。

第一日は雪打までバスで上り、明日の滑降レースを前にして互に他校の技倆を横眼でにらみながら、丸池のガリバンでしのぎを削る猛訓練。夕方までに熊の湯に集結。

夜に入つて雪になる。心配していた堅いバーンも自ら整備され明くれば第二日、尺餘のラッセルの下、新雪を蹴ちらかしての大熱戦は、山スキーヤーにとつて最もふさわしきレースであつた。雪はしんと、この邊にしては珍しく風も伴わずに降りつる中を全員横手登頂。晝食後、正午よりレース開始。スタートルは頂上茶店前、ゴールは熊の湯玄關。参加選手十八名。雪は乾燥粉雪、量が少々あり過ぎたので、體力的には若干骨が折れたが、一名スキー折損以外

は、幸いにして事故もなく、賞品授與式の後、愉快であつた懇親會の幕を閉じた。

レースの記録は上位四名だけ紹介すると

①梅松延頼(日大) 13分45秒

②寺畑哲郎(立教) 15分32秒

③尾關秀夫(學習院) 16分15秒

④中島 享(早大) 16分25秒

無事故者としてのラスト、一七着は三七分〇五秒であつた。團體得点としては各校の上位三名の平均タイムを比較して日大山岳部(一七分三七秒)が優勝した。

今回の懇親會に際しては、土曜會及び金子實氏より多額の御寄附を賜り、秀山荘、細野テント店、好日山荘、高橋靴店、若溪堂の各位よりレースの賞品として多くの物品を御惠贈頂いた。こゝに厚く御禮申上げます。また千谷壯之助氏その他のOB諸氏には貴重なる餘暇を割いてお骨折りを願ひ、懇親會の實現を可能ならしめて下さつた。併せて御禮申上げます。(KI)

アメリカのマカルー

峰遠征隊と交歓

去る二月二十日、アメリカのマカルー峰遠征隊一行九名が軍用機にてインドに向う途中東京に立寄り、本會員と交歓のひと時を過した。

一行九名は翌二十一日、棋會長の案内で上野の科學博物館を訪れ、ネパールの植物、民藝品などを觀賞し、午後三時より本會圖書室に招じてマナスル登山隊員と談笑のひと時をもつた。一行はマナ

スル隊の裝備、携行品等に非常な關心と興味を持ち、各員、マナスル隊員の誰彼を揃えては此處、彼處に談笑する光景は誠になごやかな雰圍氣であつた。一行の中の一人にはダージリンを出生地とする青年がおり、三田前隊長とヒンドスタンニ語を以て談笑する等誠に楽しき交歓の集いであつた。一行には「山岳」と「山日記」を進呈し、マナスルのスライドを三田前隊長の説明によつて映寫した。一行は二十五日早朝、インドに向け出發したが、堀田隊長はじめマナスル隊一行とのカトマンズにおける再會を約し併せてお互いの成功を祈つて固き握手を交わした。

なお一行の離京に際し、シリール隊長より棋會長宛宛の如き丁寧なる禮狀が送られて來た。

日本山岳會會長 横 有恒殿 拜啓、過日は貴殿並びに日本山岳會より温かきおもてなしに興り衷心より御禮申上げます。我々が貴國に立寄つた事は生涯忘れることの出来ぬよき記念として末永く我々の心に残るものであります。唯滞在期間が餘りに短かつたという事は誠に残念でした。我々は何となく長らく滞在して貴國をよく知る事が出来たらと切に望むものであります。

併し、此度を機會に貴殿と交通を續け、日本の登山家の方々とお互いに或は意見を交換し、或は經驗を交換する事の出来る事を衷心より望んでおります。

我々一同はマナスル隊の御成功を期して止みません。そしてマナスルの頂上に立たれるという吉報を切に期待するものであります。

カリフォルニア・ヒマラヤ遠征隊
ウィリアム・シリール

★マナスル登山隊

歡送會

一月二十六日午後六時半より體協食堂において開催、棋會長歡送の辭を述べ、堀田隊長隊員を代表して謝辭と決意を語り、三田前隊長より隊員の紹介を行つた後、日高評議員の發聲で萬歳を三唱して散會。出席者は七十餘名の多きに達し極めて盛會であつた。

★アンナブルナ

遠征隊歡迎會

二月十九日午後六時半より本會ルームに今西隊長、藤平の兩氏を迎えて開催、さやかな會ではあつたがアンナブルナを繞る話に花が咲き、同隊撮影の素晴らしいスライドを鑑賞した。出席者は松方評議員他二十餘名。他の隊員諸氏の御出席を願へなかつたのが残念であつた。

カルカッタ市長來京

二月一日カルカッタ市長ムカデ氏來京されたのを機に、青木勝氏の御幹旋により同日午後三時毎日新聞社で棋會長、松方評議員、三田前隊長、堀田隊長、成瀬常務理事が面接、昨年のマナスル隊に寄せられた好意を謝すると共に本年も御協力を賜るようお願いした。尚二月八日平沼前體育協會長の御幹旋で同氏を日活ホテルに訪問、本會より浮世繪一幅を進呈した。

會務報告

役員會

一月 役員總會(二十日)

出席者 理事 成瀬、渡邊、交野 沼倉、今村、加藤(泰)

評議員 石原、林

靜岡支部 大室、鹽田、近藤

議事

一、一九五四年度マナスル登山隊員決定の件
二、一九五三年度マナスル遠征報告コピイライトの件
毎日新聞社版報告書發行後は本會に於てコピイライトを所有する事とする。

三、「山岳」第四九年編集の件
マナスル遠征報告、早大アコンカグア登頂報告、京大アンナブルナ登山報告を主として約百八十頁の内容とし、編集擔當者は常務理事會にて選定のこととする。

四、本會財政確立に關する件
現行會費にては會務をまかない切れない状態になつてゐる。これが打開策として會費の改訂等につき常務理事に於て至急立案のこととする。

五、フランス山岳會との連絡の件
佛山岳會より在日大使館を通じて會員近藤等氏を連絡員に認定方依頼を受けた件につき同氏の承諾を得たので正式に連絡員に決定。

六、靜岡支部強化の件
第二十回國體登山部門が靜岡縣で行われるので、その企畫運営の完全円満を期するため近く靜岡に理事を派遣することに決定。

報告

一、山日記」編集の件 林

一九五五年版は本年の如く刊行のおくれぬように準備に着手した。尚本年度山日記執筆並びに編集事務助力者に對し應分の謝禮を出すことにした。

二、一九五四年度マナスル遠征費

外貨割當額決定の件 成瀬

大蔵省よりオリンピック委員會を通じ二三・二六四ドル割當決定の通知を受けた。

三、オーストリア山岳會第七五周年紀念祭の件 成瀬

オーストリア山岳會より紀念祭参加方の案内を受けたので、これに對し祝電並びに會長名にてメッセージを送った。

二月 臨時役員總會(三日)

出席者 榎會長、理事・成瀬、渡邊、交野、金坂、沼倉、今村

評議員・谷口、神谷、村井、岩永

監事・石原

議事

一、マナスル遠征資金に關する件

出光氏より日本山岳會會長榎有恒個人に對し一時融資方申出でを受けた件は先方が會長個人を信用しての事であること、又これが返済は毎日側の募金を引當にし得る確實な見込ある事を認め出光氏の好意を受諾することに決定。

二、募金報告 榎

今年度は積極的に政府機關を勧請するとともに民間の大會社、團體に協力方を懇願し順調に進んでいる。

關西支部便り

會報一七〇号に報告された以後(十月)の支部の動きは小集會三回、國體参加(役員)、有志懇親會

とがあつた。小集會はマナスルが主となつたが、各回とも本年は参加者が増加してきた。これはおそろくテーマがよいのであらう。それと若い人達よりもかつて山に登つた方々が熱心に新智識をきかれていることも注目し直する。

小集會は左の通りであつた。

★十月七日 阪大記念館ホール

マナスル登攀の話 高木正孝氏

報告よりも質疑應答を主とした

マナスルよりもヒマラヤ遠征について高木さんの體驗されたことを主として語られた(三三名参加)。

★十月二十七日 阪大記念館ホール

マナスル登攀(幻燈と映畫)

説明 山崎英雄氏

國體の歸りにマナスル隊員山崎氏によつて頂いてカラー・スライドを見せていただいた。見とれるばかりの美しさに續いて未編集の天然色映畫二巻を鑑賞した(参加者三八名)この會の前に十七日に辰沼博士が依田氏のスライドをもつて來られたので連絡のつく方だけに美津濃で見ていただき、色々と醫學的なお話を伺い有益であつた。十一月は有志懇親會があつたがすでに會報に投稿してあるので省略する。

★十二月四日 毎日新聞社

マナスル科學班の話

中尾佐助氏

はじめに歩いたコースについて山の寫眞を展示しながら話され、特に未知のケハルンバやスリンギイヒマールは魅せられた。また植物の寫眞はモノクロームなのが残念だったが、植物景觀のお話とも印象的だつた。

(参加者三二名)

支部にも多くの問題があるが、なかでもルームの維持、會員増加、京阪神連絡や本部に對する希望など委員の意見をまとめている。今回ルームの署名簿を備付けたので利用されたい。また、一月以降にはルームの當番制を考えている。(田中榮藏)

第二五八回小集會

二月十八日(木) 午後六・三〇

於體協二階會議室

「アンナブルナ」登山報告

今 西 壽 雄

藤 舟 橋 明 賢

藤 平 正 夫

参加者

石坂、内山、坂本、仲、野口、川

越、諸岡、池田、橋爪、羽鳥、宇

田川、山田、神谷、松岡、福田、

櫻井、佐藤(隆)、加藤(喜)、山口

星野、村木、谷口、梅松、濱田、

山本、石井、大島、安田、干野、

成瀬、金坂、渡邊、吉田(功)、澤

田(竹)、戸野、池谷、田中、水田

古澤、初見、石原、福住、川越、

別宮、角田、村井、船越、干谷、

古澤(繁)、交野、外會員外十六名

本邦の登山界もマナスルに本會より二隊を、つづいてアンナブル

ナに京大隊を送り迎えて、我々の

山仲間の口からちに聴けるヒマ

ラヤの領域が擴つて行くのはうれ

しい。アンナブルナの登山報告は

もつと早くに伺いたかつたが、ス

ライドの完成を待つて今回京都都

から今西隊長に上京していただい

行動を舟橋隊員に、そして藤平隊員にスライドの説明をうかがつた。この遠征が從來のヒマラヤ登山と異つて踏査することなく彼の地に初めての人々によつてモンズン明けの短い適期に一氣に登頂までを決行するというプランに興味と不安とをもつて吾々はその成果を期待していた。

初めの目標アンナブルナ二峰はその南面の氷河舌端下にそり立つ大障壁にはばまれ、ここに於て目標を第四峰に變更し五七八四米のナムン・パヂヤンを各隊員も人

夫並みの荷を負つて越えマルシャンディの谷に下りその源流に向つて先年今西(錦)隊の跡をたどり

テイルマンルートに七二〇〇米まで登つて強風に天幕をとばされて登高を断念したのこと。

スライド八十枚は三五ミリ、六六セミ判いづれも見事な映像。モンズン明けのヒマラヤの山姿は美しくも峻しく映され、中でも二

峰南面氷河舌端下の大障壁、四峰前衛峰直下の青氷壁は印象が深かつた。(交野記)

× × ×

昭和廿九年三月廿五日發行

東京 都 千代田 區

神田 駿河臺 四ノ六

發行所 社 法人 日本山岳會

編輯者 渡邊 公平

電話 神田(25)八九五二番

東京 都 港區 赤坂 池田五番地

印刷所 株式會社 技 報 堂